

## 【研究ノート】

宗教と戦争  
—十字軍と三〇年戦争を事例として—

石津 朋之

## 【要約】

多くの場合、宗教は人々の価値観や行動様式の基本であり、自らの存在理由及び社会の価値や意味を付与するとともに、そのアイデンティティの基礎であるとともに他者に譲ることが出来ない核<sup>コア</sup>を為す。それら宗教には、平和を求める言説と同時に、戦争・暴力を肯定する言説が混在している（キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、ゾロアスター教、シーク教等）。

そのため、宗教が戦争の発生及び激烈化の大きな要因であり、近年その比重をますます高めているという議論が存在する一方で、宗教に起因する戦争は全体の一部に過ぎず因果関係を立証できないとの反論も存在する。本論は、宗教と戦争の関連性について、キリスト教の戦争観がヨーロッパ最大規模の宗教戦争である十字軍及び三〇年戦争に及ぼした影響を事例として検討を試みたものである。

キリスト教における戦争観を歴史的に概観すれば、その受容及びローマ帝国による国教化の過程で、原始キリスト教における絶対平和主義から正戦論へと移行し、さらに十字軍を通じて聖戦論へと発展する。その正戦・聖戦論は三〇年戦争を通じて世俗化され解体されるも（無差別戦争観）、世界大戦の惨禍を経て国際法的正戦論（戦争違法論）として継承・再生されることとなった。宗教の戦争観及び平和観は単なる聖典や教義の反映に留まるものではなく、外部環境との「妥協」により、再解釈され形成されていくものであると認識される。

事例として、十字軍を概括すれば、①宗教的動機、②世俗的動機（政治的動機及び経済的動機）、が目的であり、次第に後者に比重を移行させていった戦争であると整理できる。前者はエルサレム解放及び贖宥（罪の償いの免除）の追求であり、後者は異教徒及び異端に対する戦いを通じたキリスト教世界の統合並びに経済的利益（領地・商圏）の追求である。結果として、オリエントへの8回の十字軍に加え、イベリア半島（レコンキスタ）、対モンゴル、北ヨーロッパ（バルト海沿岸）といったヨーロッパ全周に対して、変質しつつ繰り返された十字軍は、文化・経済的に近代の成立を準備しヨーロッパ諸国にキリスト教共同体としての意識を与えたと同時に他者（異教徒）への不寛容を増大させ、その残虐行為によってイスラム社会全体の反発を招くこととなった。

同様に、三〇年戦争を概括すれば、ルターの宗教改革を端緒としたプロテスタントとカトリックのドイツ国内の宗教対立に、デンマーク、スウェーデン、オランダのプロテスタント諸国

及びカトリック国のフランスが政治的利害から介入し、拡大・長期化したものである。ドイツ国内においてはカトリックであるハプスブルク家の勢力拡大を恐れた多くのカトリック諸侯がプロテスタントに改宗し、最終的にはカトリックであるハプスブルク・ブルボン両家がヨーロッパの覇権を巡り直接相争うに至った。三〇年戦争の直接的な契機は宗教を巡る対立であったが、根源的には覇権を巡る国際政治戦争に他ならず、宗教的問題と世俗・政治的な利害の交錯が認められる。

以上の分析から、以下の2点が明示化される。第1は宗教が外部環境に応じて解釈されなおす可変性を維持してきたこと、第2は宗教対立に起因する戦争であっても、常に政治・経済的な利害対立が背景に存在するということである。

宗教は、死への恐怖を埋める装置である。20世紀のナショナリズムの高揚とともに、宗教は「祖国のために死ぬ」という疑似宗教的言説を生起させる背景となっている。宗教（疑似宗教）の中に構造的に潜むものが対立や戦争を生み出す可能性がある一方で、宗教自体が戦争の直接の原因でないもののように思われる。宗教は戦争遂行上の目的である利害対立を隠匿し、安易に正当化できる装置として用いられてきたが、同時に、歴史の大部分の時間において宗教を信仰する人々が平和的に共存し、対立が顕在化していないことも事実である。あらゆる宗教は、権力との結びつきによって合理化され再解釈されることを前提とすれば、宗教は権力者により利用される受動的な存在として認識される。一方で、宗教戦争やイデオロギー戦争が激烈化するのも疑いようのない事実である。宗教は戦争において受動的かつ能動的であるという両義性を有するといえる。

はじめに

宗教が人々の心の平和、そして国際社会の平和のために存在している事実に対して異論を唱える者はいないであろう。実際、神なき時代と言われる今日においても、宗教の聖地を訪れる人々は多い。人々の価値観や行動様式の基本となるのは、多くの場合、宗教である。人々は自らの存在理由を確かめたいと思うものであり、自らが生存する社会の価値や意味を突き詰めたいて考えている。そこから宗教は生まれる<sup>1</sup>。

そして、信仰心が薄れたと言われる今日でも、人々は信仰にまつわる慣習に影響され続けている。また、伝統的な宗教的偏見や根拠のない通念ですら、それが因習であり理性に反すると判っていても、今日でもまかり通る事例も多く、例えば『聖戦の歴史——十字軍遠征から湾岸戦争まで』の著者であるカレン・アームストロング (Karen Armstrong) は次のように述べて

---

<sup>1</sup> こうした点について詳しくは、橋爪大三郎『世界がわかる宗教社会学入門』(筑摩書房、2006年) 19頁を参照。

いる。すなわち、「私たちの思考は、私たちの態度を規定する言語や制度によって根本的に形成され、全く異なった文化や言語体系に基づいたものを本当に分かるということは、おそらくあり得ないであろう。また、私たちの中に脈々と続く偏見を取り去ることもできないであろう。私たちができることは、このような偏見が存在するということを認識するくらいであろう<sup>2</sup>」。

その一方で、本当に宗教は国際社会及び国家間の平和、さらには人々の内面の平和のために貢献しているのであるかとの素朴な疑問は残る。

例えばユダヤ教の聖典である『旧約聖書』を見れば、そこには、「戦いの神」や「聖絶」といった好戦的な表現が多々見受けられる。その中でも「ヨシュア記」の内容を素直に読めば、あたかも『旧約聖書』は戦争や暴力を肯定しているのでは、との印象すら受けてしまう<sup>3</sup>。

また、キリスト教の影響が極めて強かった中世ヨーロッパの十字軍でも、例えばテンプル騎士団は剣を神のために使うため、「戦列にあつてさえ平和の人」であるとされた<sup>4</sup>。また、聖ヨハネ（ホスピタル）騎士団は、戦いは施しや貧者の世話の延長であるとさえ考えていた<sup>5</sup>。

だがこうした事実は、ユダヤ教やキリスト教に対する人々の一般的な認識である「汝、殺す<sup>なか</sup>勿れ」とは大きく矛盾するように思われる。

実はその他の宗教についても、そこには、平和を求める言説とあたかも戦争や暴力を肯定するような言説が混在している。イスラム教や仏教はもとより、ヒンズー教、ゾロアスター教、シーク教などもそうである。また、1つの宗教の中でも見解の相違——宗派——が存在するというのが実情である<sup>6</sup>。アメリカの社会学者マーク・ユルゲンスマイヤー（Mark Juergensmeyer）が指摘したように、暴力を是認する思想やイメージは、ある特定の宗教の専

<sup>2</sup> カレン・アームストロング『聖戦の歴史——十字軍遠征から湾岸戦争まで』塩尻和子、池田美佐子共訳（柏書房、2001年）267頁。

<sup>3</sup> 加藤隆『旧約聖書』（NHK出版、2014年）10～39頁。オドン・ヴァレ『一神教の誕生——ユダヤ教、キリスト教、イスラム教』佐藤正英監修（創元社、2000年）42～63頁。岡山英雄、李象奎、渡辺信夫、野寺博文、岩崎孝志『キリスト者の平和論・戦争論』（いのちのことば社、2009年）9～10、17頁。石川明人『キリスト教と戦争——「愛と平和」を説きつつ戦う論理』（中央公論新社、2016年）82～85頁。橋爪大三郎『戦争の社会学——はじめての軍事・戦争入門』（光文社新書、2016年）52頁。

<sup>4</sup> A・ジョティシュキー『十字軍の歴史』森田安一訳（刀水書房、2013年）128頁。

<sup>5</sup> ジョティシュキー『十字軍の歴史』131頁。第1回十字軍が1099年にエルサレムを奪回し、そこにエルサレム＝ラテン王国を建国したが、軍隊の主力の殆どはヨーロッパへ帰還したため、それに代わってこの王国を守ったのが騎士修道会であった。騎士修道会は、キリスト教巡礼者の保護のための奉仕団体として発足し、ローマ教皇にも認められた。騎士と聖職者の2つの顔を持つ集団であり、テンプル騎士団、聖ヨハネ騎士団、ドイツ騎士団が有名である。聖ヨハネ騎士団は、エルサレムの巡礼者の中に病人が出た際に病院の役割を果たしたことから、ホスピタル騎士団とも呼ばれた。この騎士団はその後、地中海のロードス島に拠点を移したため、ロードス騎士団と呼ばれるようになったが、海上貿易を行なう一方、城砦を築いて防備を強化した。だが1522年、オスマン帝国に敗れ、騎士団はマルタ島に逃れることになる。

<sup>6</sup> 例えばキリスト教内のカトリックとプロテスタントの対立、イスラム教内のシーア派とスンニ派の対立などは、ある意味でその宗教の解釈をめぐるものであり、価値をめぐる対立を象徴するものである。そしてこれは、時として激烈な戦争へと発展する。

有物ではなく、世界の主要な宗教の殆どが暴力行為の実践者を生み出してきた<sup>7</sup>。そうであれば、やはり宗教は戦争の大きな原因なのであろうか。

そこで本論は、特定の宗教の聖典及び教義などに深く立ち入ることは控え、一般論としての宗教と戦争及び暴力の関連性をめぐる示唆を得ることを目的とした。

実は、宗教と戦争の関連性について研究すること、しかも本論のように11～13世紀の十字軍の戦争や17世紀の三〇年戦争について研究することは、極めて今日的な意味を有する。なぜなら、21世紀の国際社会はあたかも宗教を中心とした対立の時代、さらには新たなヨーロッパ中世あるいは近世へと向かいつつあると多々論じられているからである<sup>8</sup>。実際、アメリカの国際政治学者サミュエル・ハンチントン (Samuel Phillips Huntington) は、自らの論考及び著書で「文明の衝突」という概念を世に問う中で、将来の国際政治の基調は文明間の対立であり、文明間の対立の原因の1つは宗教であると主張した<sup>9</sup>。

確かに、宗教が戦争の大きな原因と考えられる事例は多々見受けられ、また、宗教が戦争を激烈化させる傾向が強い事実についても否定できない。中世ヨーロッパの十字軍や三〇年戦争、現代では20世紀のインド・パキスタン戦争や北アイルランド紛争などは、宗教が戦争の大きな原因と考えられている。もちろん、そのことが直ちに、宗教がなければ戦争がなくなるとの結論に達するわけではない。逆に、無神論者 (例えばアナーキストやマルクス共産主義者) によって戦争やテロリズムが行われている事実を想起すれば、宗教と戦争の強い因果関係は認められないとも言える<sup>10</sup>。

実際、チャールズ・フィリップス (Charles Phillips) とアラン・アクセルロッド (Alan Axelrod)

---

<sup>7</sup> 詳しくは、マーク・ユルゲンスマイヤー『グローバル時代の宗教とテロリズム——いま、なぜ神の名で人の命が奪われるのか』、立山良司監修、古賀林幸、櫻井元雄共訳 (明石書店、2003年)。マーク・ユルゲンスマイヤー『ナショナリズムの世俗性と宗教性』阿部美哉訳 (玉川大学出版部、1995年) を参照。併せて、星川啓慈、石川明人『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか?——私たちの戦争と宗教』(並木書房、2014年) 81～87頁を参照。

<sup>8</sup> こうした点について詳しくは、例えば、田中明彦『新しい中世』(日本経済新聞出版社、2003年)。ヘドリー・ブル『国際社会論——アナーキカル・ソサイエティ』白杵英一訳 (岩波書店、2000年)。伊藤憲一『新・戦争論——積極的平和主義への提言』(新潮新書、2007年) を参照。

<sup>9</sup> サミュエル・ハンチントン『文明の衝突と世界秩序の再創造』鈴木主税訳 (集英社、1998年)。ハンチントンは、将来の戦争は「フォルト・ライン戦争」となり、それは文明の断層線上で生起すると予測した。彼によれば、数千年にもわたる人類の歴史は、宗教が「僅かな相違」などではなく、おそらく人類の間に存在し得る最も深刻な相違である可能性が高い。「フォルト・ライン戦争」が頻発しそれが激烈かつ暴力的なのは、異なる神を信じるのが原因であることが多いのである。ハンチントンの議論については併せて、星川、石川『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか?』75～81頁、高山博『ヨーロッパとイスラーム世界』(山川出版社、2007年) 71～72頁を参照。

<sup>10</sup> キリスト教徒やイスラーム教徒がテロリズムを引き起こすことは事実である一方、アナーキストやマルクス共産主義者に代表されるいわゆる無神論者も同様にテロを引き起こしている。その意味では、宗教とテロ及び暴力、さらには戦争は関連性がなく、テロリストが単に宗教を口実として用いているに過ぎないとも言える。橋爪『世界がわかる宗教社会学入門』280頁。

の編著『戦争百科事典 (*Encyclopedia of Wars*)』は、歴史上に生じた 1,763 件の戦争を対象に、その原因について以下のように結論を述べている。

- ①1,763 件の戦争の中で、宗教的な戦争は 123 件である (全体の僅か 6.98 パーセント)。
- ②その中でイスラム教に関係した戦争は 66 件である。
- ③イスラム教を除外すると、それ以外の宗教的な戦争は僅か 57 件である (3.23 パーセント)<sup>11</sup>。

上記の数字の正否はさておき、ここからは宗教と戦争の因果関係など殆ど認められない。

では、以下で文化——とりわけアイデンティティ——と対立及び戦争をめぐる問題について少し考えておこう。

文化とは人間が造り出し、社会で共有され伝承されてきた言語、思想、芸術、技術、社会制度、生活様式、そして宗教などを広く包含する概念である<sup>12</sup>。ある民族の宗教はその民族のアイデンティティと強く結び付いている。アイデンティティを象徴する最大のものが、言語と宗教であるからである。そして、宗教に代表されるアイデンティティをめぐる戦争では、それが異なる相手を徹底的に殲滅する以外に方策が見付からなくなる事態が多々生じる。宗教は優れてアイデンティティの問題であるとされ、そこには他者には譲れない、他者とは共有できない核の部分があるからである<sup>13</sup>。

文化、とりわけアイデンティティが対立や戦争と大きく関係する理由は、それが、個人、民族、さらには文明のどの次元においても、他者を規定することによってのみ定義され得るからなのであろう。

## 1 キリスト教と戦争

### (1) 絶対平和主義から正戦論へ

前述の『旧約聖書』とは対照的に、『新約聖書』には非暴力的な生き方が示されている。もちろん、平和を説いていると言われる『新約聖書』にも、「万軍の神」、「信仰の盾」、「光の武具」、「キリストの兵士」といった表現が見られるという<sup>14</sup>。

<sup>11</sup> 数字は、中川健一「宗教と戦争」『月刊 ハーベスト・タイム』第 344 号 (2014 年 11 月) より再引用。

<sup>12</sup> 小寺聡編著『もういちど読む山川倫理』(山川出版社、2011 年) 250～251 頁。井沢元彦『世界の[宗教と戦争]講座』(徳間書店、2001 年) 333～343 頁。

<sup>13</sup> この事実をいち早く指摘したのが、メアリー・カルドー『新戦争論——グローバル時代の組織的暴力』山本武彦、渡部正樹訳 (岩波書店、2003 年) であった。

<sup>14</sup> 石川『キリスト教と戦争』94 頁。星川、石川『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか?』113～114 頁、

なるほどいわゆる原始キリスト教は、殺人や殺傷に反対するだけでなく、軍隊での服務あるいは兵役も拒否し、戦争に反対する絶対平和主義的な理想を掲げていた。しかし4世紀以降、こうした絶対平和主義は正戦論へと移行し始める。実は、このような移行はキリスト教がローマ帝国の宗教と認められた当然の帰結であった<sup>15</sup>。

当初、キリスト教徒はむしろ国家（ローマ帝国）によって迫害されていた立場であり、無抵抗及び非暴力の立場を貫いていた。だが、これが大きく転換したのは、キリスト教が313年に公認され、380年に国教化されたからである<sup>16</sup>。キリスト教は一旦、ローマ帝国という体制に取り込まれると、暴力を行使する機会に多々接することになり、それを正当化する必要に迫られたと言えよう<sup>17</sup>。

このようにある宗教の戦争観及び平和観とは、単なる聖典や教義の反映に留まるものではなく、外部環境とのいわば「妥協」によって形成されるのが常である<sup>18</sup>。

### (2) 「妥協」したキリスト教

キリスト教は世俗権力と妥協する過程で、ローマ帝国の戦争を支援、その一方で帝国は征服した地域の人々にキリスト教を強要した<sup>19</sup>。そして、これに伴ってローマ帝国の戦争は異教徒に対する聖戦であるとの認識が現れてくる<sup>20</sup>。

その後、中世ヨーロッパを迎えて多くのキリスト教聖職者が異教徒に対する戦い——その代表例が十字軍——の必要性を強く唱えたのにはこうした背景がある<sup>21</sup>。十字軍は「神は我々と共におられる」との信念の下で戦われたが、戦争が神の名の下に行われる時、それは積極性を帯びることになる。

---

岡山、李、渡辺、野寺、岩崎『キリスト者の平和論・戦争論』11～13頁。

<sup>15</sup> ヴァレ『一神教の誕生』42～63頁。星川、石川『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか?』114頁。石川『キリスト教と戦争』120～124頁。以下の記述は、こうした著作に多くを負っている。

<sup>16</sup> 岡山英雄、富岡幸一郎『キリスト者の戦争論』（地引網出版、2006年）14頁。ローマ帝国のキリスト教に対する迫害であるが、皇帝は自らへの崇拜を人々に要求したものの、父なる神を唯一の信仰対象とするキリスト教徒は、ローマの多神教に留まらず、皇帝崇拜も受け容れなかった。これが迫害へと繋がった。

<sup>17</sup> 石川『キリスト教と戦争』138～141頁。

<sup>18</sup> 橋爪『戦争の社会学』62頁。

<sup>19</sup> この時期、明らかにキリスト教は、正当防衛に関しても肯定的な立場を示している。石川『キリスト教と戦争』25頁、岡山、李、渡辺、野寺、岩崎『キリスト者の平和論・戦争論』30頁。

<sup>20</sup> ローマ帝国の戦争について詳しくは、ハリー・サイドボトム『ギリシャ・ローマの戦争』吉村忠典、澤田典子共訳、澤村典子解説（岩波書店、2006年）。エイドリアン・ゴールズワージー『古代ローマの戦い』遠藤利国訳（東洋書林、2003年）などを参照。

<sup>21</sup> ヴァレ『一神教の誕生』68～85頁。

## 2 「正戦」と「聖戦」を考える

### (1) 原始キリスト教

歴史上、戦争に対するキリスト教の立場は次の3つに分類できるという。

第1に、いかなる暴力も否定する絶対平和主義、第2に、正義や平和を守るために必要最小限の軍事力行使を容認するいわゆる正戦論、第3に、神の名において積極的に戦いを遂行する聖戦論、である<sup>22</sup>。

前述したように、ローマ帝国を支える国教となったキリスト教と絶対平和主義的な原始キリスト教の間に大きな<sup>ギャップ</sup>溝が生じることになり、これに対するいわば妥協案として正戦論といった概念が生まれてきた<sup>23</sup>。そしてその過程で、侵略の抑止など正当な理由があること、それが

<sup>22</sup> 詳しくは、Martin Ceadel, *Thinking about Peace and War* (Oxford: Oxford University Press, 1987); Martin Ceadel, *The Origins of War Prevention: The British Peace Movement and International Relations 1730-1854* (Oxford: Oxford University Press, 1996) を参照。併せて、星川、石川『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか?』112～114頁を参照。

イギリスの国際政治学者マーチン・キーデルは、一般に戦争と平和に対する態度には、第1に、戦争そのものに価値があるものとして積極的に肯定する「軍国主義」の立場、第2に、それとは対極に位置して全ての戦争を否定する「絶対的平和主義」の立場があると主張する。また、もちろん現実にはこの両極端な立場を支持する人々は少なく、第3に、侵略戦争は否定するものの戦争自体に対しては肯定的な「現実主義」の立場、第4に、一般論としては戦争には否定的であるが必ずしも絶対的なものではない「相対的平和主義」の立場があるとする。「現実主義」は自衛のための戦争は必要であると考え、さらには、ある程度の軍事力を保持することこそが平和へと繋がると考えるが、これに対して「相対的平和主義」は、強大な軍事力は戦争を誘発して平和そのものを脅かすと考える。

キーデルは、基本的に戦争と平和をめぐる立場はこの4つに分類可能であるとするが、近年では、少し厄介な新たな立場が注目を集めつつある。それが、戦争の根絶や平和の確立を強く求める一方でそのためには積極的な軍事力行使——「先制攻撃」あるいは「予防戦争」——も躊躇しないとの立場であり、これをキーデルは「聖戦」の立場と定義している。2003年のイラク戦争の際の、アメリカのいわゆる「ネオコン」と呼ばれた人々はその代表であろうが、同時に、今日において人道的介入や「保護する責任」、さらには民主主義制度の地球規模の普及を強く主張する論者の多くは、この立場と考えて良いであろう。それが、21世紀の「時代精神」なのである。

また、キーデルはこうした「聖戦」が認められるためには少なくとも以下の3つの条件が必要であると指摘する。第1に、攻撃側に倫理的な確信があり、国際法的には、国連決議など国際社会による正統性の付与が不可欠である。第2に、攻撃側は目的を達成するための十分な軍事力を確保する必要がある。また、国際社会が共同で行動することが望ましい。第3に、攻撃はあくまでも利他的でなければならず、例えば、利潤目的であると批判されるようなことがあってはならない。だがここにも、一体こうした条件を満たしているかを誰が判定するのかといった問題、そしてこれをさらに敷衍すれば、誰にとつての「平和」なのかとの問題が登場してくるが、こうした「聖戦」の一方向的な遂行は結局、平和に対する冷淡な見方が地球規模で広まる危険性すら孕んでいる。

<sup>23</sup> 正戦論について詳しくは、マイケル・ウォルツァー『戦争を論ずる——正戦のモラル・リアリティ』駒村圭吾、鈴木正彦、松元雅和共訳（風行社、2008年）13～42頁。マイケル・ウォルツァー『正しい戦争と不正な戦争』萩原能久監訳（風行社、2008年）261～277、419～432頁。山内進編著『序論 聖戦・正戦・合法戦争』『「正しい戦争」という思想』（勁草書房、2006年）。眞嶋俊造『正しい戦争はあるのか?—戦争倫理学入門』（大隅書店、2016年）84～92頁を参照。以下の記述は、こうした著作の内容に多くを

最終的な手段であること、成功の見通しがあること、非戦闘員を攻撃しないこと、必要以上の攻撃をしないこと、などの今日でも通用する具体的な指標が出てくることになる。

だがこの正戦論は、とりわけ異教徒に対しては聖戦論へと転化することになる。これは、異教徒や異民族に対する「オリエンタリズム」や「軍事オリエンタリズム」に通じる世界観である。

### (2) 正戦論から無差別戦争観へ

三〇年戦争との関連で17世紀に目を転じれば、中世ヨーロッパのキリスト教世界を中心とする正戦論は、同世紀にさらなる転機を迎えることになる。

その転機となったのが1618～48年のヨーロッパの「宗教」戦争であり、そこに登場したのが近代国際法の父と称されるオランダの法学者フーゴー・グロチウス（Hugo Grotius 1583～1645年）である。そして、1648年以降に発展するいわゆるウェストファリア体制を契機として、正戦論から無差別戦争観への移行が始まった<sup>24</sup>。

周知のように、三〇年戦争の講和としてのウェストファリア条約で国家主権の独立性が認められ、そこには戦争をめぐる決断を下す外交権も含まれた。主権国家を超える上位の権威は認められず、キリスト教による一元的権威を前提とする正戦論を適応することは困難となり、戦争の合法性あるいは違法性を問うことのない無差別戦争論が支配的になっていく<sup>25</sup>。

こうした国際政治構造の下、国家間の戦争を阻止する1つの装置として「勢力均衡（バランス・オブ・パワー）」が用いられることもあったが、この手段は必ずしも有効に機能しなかった。

何れにせよ、十字軍や三〇年戦争を経て主権国家から構成される近代ヨーロッパ社会は、宗教を政治の世界すなわち公的領域から区分及び排除し、聖戦も排除していった。そして、正戦

---

負っている。

正戦論はいわば世俗的戦争論であり、一定の条件下では「正しい」とされ、一定の条件の下では戦争が「容認」される（山内進『十字軍の思想』（筑摩書房、2003年）14頁）。こうした立場の戦争観には、アウレリウス・アウグスティヌス（Aurelius Augustinus 354～470年）やトマス・アクィナス（Thomas Aquinas 1225年頃～1274年）など、多くの神学者や法律家はその概念構築に参画しており、これは今日の戦争観、あるいは軍事介入のための指標として国際社会で受け継がれている（石川『キリスト教と戦争』21～42、113～144頁。星川、石川『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか？』114～116頁）。

これに対して聖戦とはいわば宗教（キリスト教）的戦争論であり、そこでは戦争は義務や報酬（贖宥）とされ、殉教が求められ、一般的には激烈化する傾向が強いとされる（山内『十字軍の思想』14頁）。こうした戦争観の下での戦いは、相手が何か悪い「行為」をしたからではなく、相手が悪い「存在」だからという理由だけで行われる（石川『キリスト教と戦争』21～42、113～144頁）。

<sup>24</sup> グロチウスは教会の権威に依存することなく、異なる民族にも通用する人類共通の法としての国際法を構想した。橋爪『戦争の社会学』107～123頁。

<sup>25</sup> 石川『キリスト教と戦争』161～162頁。岡山、李、渡辺、野寺、岩崎『キリスト者の平和論・戦争論』44～48頁。



論の中核的な思想は世俗化された形で、すなわち国際法の中に継承されることになる。

### (3) 「正戦」と「聖戦」のあいだ

では、当初は極めて平和主義的であったキリスト教がいかにして暴力や戦争を肯定、あるいは少なくとも黙認するに至ったかについて改めて考えてみよう<sup>26</sup>。

『新約聖書』を素直に読めば、疑いなくキリスト教、とりわけ原始キリスト教が絶対平和主義的あるいは反戦的であったことは事実である。だがその後、第5代ローマ帝国皇帝ネロ(Nero Claudius Caesar Augustus Germanicus)によるキリスト教徒の迫害などを経て、キリスト教は313年にローマ帝国で公認され、380年には国教に指定された。

その後、ローマ帝国を支える宗教としてのキリスト教と、絶対平和主義的な原始キリスト教の間に生まれた<sup>ギャップ</sup>溝を埋めるために正戦論が生まれた。これに対して聖戦とはいわば宗教(キリスト教)的戦争論であり、そこでは戦争は義務や報酬(贖宥)とされ、殉教が求められ、一般的には激烈化する傾向が強いとされた<sup>27</sup>。

だが、中世ヨーロッパのキリスト教世界を中心とした正戦の思想は、17世紀にはその有用性が大きく問われることになった。

この転機が三〇年戦争であり、そこに登場したのがグロチウスである<sup>28</sup>。グロチウスは同戦争期に国際法を確立したとされ、1648年に始まるウェストファリア体制を契機として、正戦の思想が無差別戦争観へと移行し始めた。無差別戦争観とは、近代主権国家体制において国家より上位の主体は存在しないため、国家が正しいと判断した戦争は全て正しいとする戦争観である。そしてその後は、平和を維持するために勢力均衡といった装置が用いられることもあったが、こうした戦争観の下では、戦争そのものを合法とした結果として、国際法が平時の国際法と戦時国際法の2つに区分されることになる。

だがその一方で、18世紀末頃からイギリスを中心とするヨーロッパ諸国やアメリカにおいて、戦争は否定すべきものであり、根絶可能であるとの認識が徐々に拡がり始めた。これが今日の平和思想の基礎であるとされ、例えば、20世紀においてもクインシー・ライト(Philip Quincy Wright)の著作『戦争の研究』などは、まさに戦争は根絶可能、あるいは少なくとも抑制可能との確信から書かれたものである。

<sup>26</sup> 近年、長崎や五島のキリスト教会群は世界遺産に登録され、広く注目を集めているが、実は、布教目的で日本を訪れた16世紀のキリスト教宣教師の背後に、自国の帝国主義的な野心が隠されていたことは周知の事実である。平川新『戦国日本と大航海時代——秀吉・家康・正宗の外交戦略』(中公新書、2018年)3～5頁。

<sup>27</sup> 山内『十字軍の思想』14頁。

<sup>28</sup> 橋爪『戦争の社会学』107～108頁。

加えて、とりわけ20世紀前半の第一次世界大戦後、それまでとは異なり戦争は許されないものの、違法なものとの考え方——戦争違法化——がさらに広がることになり、現在に至っている。膨大な犠牲者を出した同大戦後に設立された国際連盟は、それまでの勢力均衡を中心とする平和から国際レジームによる平和への移行を目指したが、その過程で戦争そのものの正当性が再び問われ始め、正戦の思想が復活することになる。もちろん、今日でも無差別戦争観は一部に根強く残っており、それは内政不干渉との言葉に如実に現れている。

### 3 十字軍について

#### (1) 十字軍の起源と目的

それでは以下では、宗教と戦争をめぐる関係を考えるための最初の事例として、11～13世紀の十字軍の歴史を時系列で簡単に振り返っておこう。

十字軍の歴史について語る際、その出発点となるのは1095年に開催されたクレルモン会議である。その背景として11世紀のヨーロッパでは、キリスト教の「純化」を求めた教会改革（聖職叙任権闘争——司祭などの叙任権などをめぐる神聖ローマ帝国皇帝とローマ教皇の対立）が起り、その結果、教会（聖）の指導による世界（俗）の浄化が始まり、それが十字軍という聖地エルサレムの浄化に繋がるとの認識が広がりつつあった<sup>29</sup>。

そして十字軍が実施された目的は、ローマ教皇ウルバヌス二世が開催したこのクレルモン会議の内容から明らかである<sup>30</sup>。

---

<sup>29</sup> 山内『十字軍の思想』54～56頁、62頁。

<sup>30</sup> 十字軍の目的あるいは動機については、以下の説も有力である。すなわち、十字軍はヨーロッパの荘園領主の次男、三男以下の男子に、東方世界で新たな土地と富を勝ち取るという形で、経済的向上を図り、社会的及び政治的地位を高める機会を与えた（ジョティシュキー『十字軍の歴史』24頁）。ヨーロッパ各地で見られたように、長男が土地を相続するとの慣習が、次男や三男に東方での軍事的冒険をより魅力的なものにしたのである（同上、62頁）。

だが同時に、十字軍に参加した騎士（軍人）の動機が如何なるものであったにせよ、一旦、十字軍が自己犠牲、勇氣、篤信といった言葉で明確に表現されるようになると、物質的な利益のためだけであったとするには無理がある（ジョティシュキー『十字軍の歴史』25頁）。実は、当時は戦争はそれ自体で悔悛行為であるとの考えも根強かったのである（同上、45～46頁）。かつては全ての暴力行為が本質的に罪深いと判断され、それゆえに贖罪を求められてきたのに対して、いまやある定められた暴力行為は赦されるばかりか、実際に暴力行為そのものが贖罪のための手段となった（同上、47頁）。

これまでは騎士としての生活と宗教者としての生活は相容れないものとして見なされていたが、この2つの生活方法の間の壁が取り除かれた（同上、51頁）。つまり、戦争は宗教生活のもう1つの道であると解釈されたのである（同上、52頁）。

また、この時代、暴力は最後の方策ではなく、政治的対話の初めの一手であった（同上、53頁）。そして、君主が十字軍参加を決定すれば、自らの生活を君主に依存していた多くの騎士は、それに従うより方策はなかったのである（同上『十字軍の歴史』62頁）。

そこには、①東方キリスト教徒の救済、②トルコ人（イスラム教徒）に対する正義の戦い、③贖宥、④東方の富、が記されている<sup>31</sup>。つまり、十字軍はその当初から純粋に宗教的な戦いではなかったのである。また、この会議でのウルバヌス二世の演説は、①東方教会が直面している野蛮なトルコ人による危険、②キリスト教徒にとってのエルサレムの神聖性、③十字軍参加者に与えられた報酬、との分類も可能であろう<sup>32</sup>。

何れにせよ、ウルバヌス二世の主導によって、エルサレムへの十字軍の派遣決議が採択された<sup>33</sup>。その結果、1096年に第1回十字軍（1096～99年）が出発したのである<sup>34</sup>。

そこで以下では、最初にオリエント（中近東）方面を目標とした十字軍、とりわけエルサレムに向けられた十字軍について概観した後、その他の地域、その他の対象、さらには、それ以降の時代の十字軍について考えてみたい。

## （2） 十字軍の諸相

通説に従えば、十字軍はオリエント方面に7回あるいは8回にわたる大規模な遠征を行ったとされる。

第1回十字軍（1096～99年）は、最も成功した十字軍であり、純粋な宗教的動機が最も濃い十字軍であったと評価される<sup>35</sup>。

確かに、ヨーロッパのキリスト教徒の立場から考えて第1回十字軍は、1099年にエルサレムの奪回に成功したこともあり、当初の目的を果たし得た遠征であったと言えよう<sup>36</sup>。また、そ

<sup>31</sup> 八塚春児『十字軍という聖戦——キリスト教世界の解放のための戦い』（日本放送出版協会、2008年）28～56、58～77頁、新人物往来社編『十字軍全史——聖地をめぐるキリスト教とイスラームの戦い』（新人物往来社、2011年）10～21頁、ジョルジュ・タート『十字軍——ヨーロッパとイスラーム・対立の原点』池上俊一監修（創元社、2010年）39～41頁。ウルバヌス二世はクレルモン会議での演説で、「かくて互いの間に平和を保つことを約したおん身らは、東方の兄弟たち、神に背く呪われた種族の脅威に晒されている兄弟たちを、救う義務を負っているのである」と述べた。ウルバヌス二世はまた、異教徒によって汚染された聖地を浄化しなければならない、とも述べている。

実はイスラム世界にとって12～15世紀は、十字軍とモンゴル帝国（後述）の双方向からの圧力に悩まされた時期であった。それまでのイスラム教の急速な普及及び発展、その結果としてのイスラム帝国の存在が、ヨーロッパの人々の恐怖感を煽り、それが十字軍に繋がったとの説もある。

<sup>32</sup> ジョティシユキ『十字軍の歴史』81頁。

<sup>33</sup> ウルバヌス二世には皇帝権に対する教皇権の優位性を獲得するとの意図があった。同時に、東方正教会に対するローマの優位を確立し、結果としてキリスト教社会の統一を目指したともされる。

<sup>34</sup> 新人物往来社編『十字軍全史』22～25頁、タート『十字軍』134～139頁。

<sup>35</sup> 八塚『十字軍という聖戦』92～108頁、新人物往来社編『十字軍全史』26～33頁、タート『十字軍』43～59、114～147頁。

<sup>36</sup> エルサレムは946年以来、ビザンツ（東ローマ）帝国領であったが、1064年以降はセルジューク・トルコが支配していた。キリスト教徒は1099年、同地を征服し、エルサレム王国を建国したのである。それ以外にも、アンティオキア公国、エデッサ伯国、トリポリ伯国を建国している。そして、聖地エルサレムと聖地への巡礼を行うキリスト教徒をイスラム教徒から保護するために、前述のテンプル騎士団や聖ヨハネ

の結果としてオリエント地域に、アンティオキア、エデッサ、トリポリ、エルサレム、の4つのキリスト教国が創設された。だがその際、イスラム教徒さらにはユダヤ教徒に対する残虐行為を行ったことで、後世に至るまで汚点を残していることもまた事実である。

ここで確認すべき点として、十字軍はもちろん戦うための遠征であるため、騎士（軍人）が参加したことはもちろんであるが、同時に巡礼的色彩も濃く、いわば「祭り」の趣きが強い行軍であった事実が挙げられる。すなわち、騎士及びその従者と共に多くの一般の巡礼者、さらにはこうした人々に対して商売を行う各種の商人たちが、混然一体となってエルサレムを目指したというのが歴史の真実に近い。

実は、当時のイスラム世界は日本のいわば戦国時代のような状況であり、イスラム教徒同士が互いに争っていた。これがこの十字軍が成功した要因の1つとして挙げられている。事実、イスラム教徒の中には十字軍と同盟を結ぶ国家も出現しており、その意味では、この段階でのイスラム世界にとって宗教的要素はあまり大きくない。また、イスラム世界では西方世界からの侵入を当初は「十字軍」として認識しておらず、世俗的な和平が可能であるとさえ考えられていた<sup>37</sup>。

その後1147年には、第2回十字軍（1147～49年）が出発した。1144年、エデッサ伯国がイスラム教徒に奪回され、これに対抗する目的で第2回十字軍の遠征が実施されたのであるが、今回は大した成果を挙げるができなかった。そして、この十字軍でキリスト教徒側は、ダマスカスで敗北を喫している。さらにその後、1187年にはサラーフッディーン（サラディン）（Salah ad-Din Yusuf）が「ハッティーンの戦い」に勝利し、イスラム教徒側がエルサレム奪回に成功した<sup>38</sup>。

実は、この第2回十字軍によって、十字軍という制度が定着したとの評価が一般的である<sup>39</sup>。確かに、この十字軍にはフランス国王とドイツ国王が参加しており、「国王」が参加することによって、その認知度は大きく高まった。同様に、その正当性と正統性も強化されたのである。

前述のイスラム教徒によるエルサレム奪回という事態を受けて、1189年には第3回十字軍（1189～92年）が出発したが、おそらく、この十字軍は最も著名な遠征であろう<sup>40</sup>。

---

（ホスピタル）騎士団が結成されたのである。

<sup>37</sup> 八塚『十字軍という聖戦』58～60頁。新人物往来社編『十字軍全史』22～25頁。タート『十字軍』40～41頁。さらには、伊藤敏樹『モンゴルVS. 西欧 VS. イスラム——13世紀の世界大戦』（講談社選書メチエ、2004年）56頁も参照。

<sup>38</sup> サラーフッディーン（サラディン）によるエルサレム奪回については、松田俊道『サラディン——イエエルサレム奪回』（山川出版社、2015年）50～54頁を参照。

<sup>39</sup> 八塚『十字軍という聖戦』138～148頁。新人物往来社編『十字軍全史』52～53頁。タート『十字軍』67～79頁。

<sup>40</sup> 八塚『十字軍という聖戦』148～153頁。新人物往来社編『十字軍全史』68～73頁。タート『十字軍』122～123頁。

そこには、バルバロッサ赤髭王（一世：ドイツ国王【神聖ローマ帝国皇帝】）（Friedrich I Barbarossa）、フィリップ尊厳王（二世：フランス国王）（Philippe II Auguste）、リチャード獅子心王（一世：イギリス国王）（Richard I the Lionheart）、というヨーロッパの大国の国王が参加している。この遠征で 1191 年には、リチャード獅子心王とフィリップ尊厳王はオリエント地域の戦略的要衝の 1 つであるアッコンの占領にどうにか成功している。

対するイスラム教徒側には、サラディンとして知られる偉大な軍人サラーフッディーンが登場し、彼のリチャード獅子心王との戦いは有名である。実はあまり知られていないものの、この時期のイスラム教徒の指導者には、ザンギー（11～12 世紀）（Imad ad-Din Zengi）、ヌールッディーン（12 世紀）（Nur ad-Din）、そしてサラーフッディーン（12 世紀）に代表されるように、政治家としても軍人としても優れた人物が出ている<sup>41</sup>。

そしてザンギー、その後継者ヌールッディーン、さらには彼の部下であるサラーフッディーンは十字軍に対する反撃を実施し、エルサレムの奪回に成功した。こうしてサラーフッディーンは、第 1 回十字軍でキリスト教徒の支配下に置かれたエルサレムを 90 年振りに奪回したが、これに対して第 3 回十字軍が実施されたのである。

この十字軍では最終的に和平が結ばれ、十字軍の矛先はその後、エジプト方面へと向けられることになった。

賢明にもサラーフッディーンは、撤退するキリスト教徒を迫害することはなかった。また、この地域のキリスト教徒の徹底的な排除は行わず、地中海沿岸の城塞の一部領有を認め、アンティオキア公の領国も存続を許した。さらにヨーロッパからのキリスト教側による聖地巡礼を許容している<sup>42</sup>。

その一方で、この時期になるとキリスト教徒が行った多数の残虐行為に対してイスラム教徒もまた、この戦いを「聖戦」と認識し始めることになる<sup>43</sup>。だが同時に、当時の戦争とは騎士（軍人）が戦う一方で、一般の人々は宗教を問わず普段通りの生活を送っていたようである。

### (3) 変貌する十字軍

1202 年、第 4 回十字軍（1202～04 年）が出発したが、この遠征はおそらく最も悪名高い十

<sup>41</sup> 松田『サラディン』50～54 頁。例えばサラーフッディーンは、イスラム勢力に十字軍に対する聖戦（ジハード）を積極的に呼び掛け、1187 年には「ハッティーンの戦い」でエルサレム王国を撃破、聖地であるエルサレムの奪回に成功している。

<sup>42</sup> 伊藤『モンゴル VS. 西欧 VS. イスラム』236 頁。

<sup>43</sup> 詳しくは、アミン・マアルーフ『アラブが見た十字軍』牟田口義郎、新川雅子共訳（リプロポート、1986 年）を参照。

字軍であろう<sup>44</sup>。

同じキリスト教徒に対する攻撃として知られる十字軍であり、1204年にはビザンツ帝国（ローマ帝国）の首都コンスタンチノーブルが略奪された上に占領され、新たに同地にラテン帝国が建国された。

繰り返すが、この十字軍でキリスト（カトリック）教徒は、同じキリスト（東方正教会）教徒のビザンツ帝国へと侵攻し、同地で大規模な略奪行為を行ったのである<sup>45</sup>。

そして、この時期にヨーロッパとオリエントを繋ぐ役割を果たし、そこで富を蓄えた国家が、例えばイタリアの都市国家であるヴェネチア、ジェノヴァ、ピサ、アマルフィなどである<sup>46</sup>。

その中でも最も注目すべきはヴェネチアの台頭であり、同国は十字軍遠征に伴う輸送と補給、さらには銀行業務を行うことで巨万の富を獲得することに成功した<sup>47</sup>。また、ヴェネチアとジェノヴァは、地中海の覇権をめぐる鋭く対立していたため、同じキリスト教徒であるにもかかわらず、一連の十字軍を通じて衝突を重ねることになる<sup>48</sup>。

以上が、オリエント方面に向かった最初の4回にわたる大規模な十字軍の概要であるが、実は、十字軍が現実に何回実施されたかについて、歴史家の見解は分かれている。エルサレム方面での十字軍、つまりオリエントへの十字軍に限定すれば、計7回という学説と計8回との学説が有力である。その後のジャン・ド・ブリエンヌ（Jean de Brienne）のエジプト遠征（1218～21年）を第5回と数えるか否かによって、十字軍の実施回数が変わってくるのである。

すなわち、このジャン・ド・ブリエンヌのエジプト遠征を第5回十字軍とすると、以後、神

---

<sup>44</sup> 八塚『十字軍という聖戦』156～189頁。新人物往来社編『十字軍全史』76～87頁。タート『十字軍』123～124頁。実はローマ＝カトリック教会から分裂し異端とされていたビザンツ帝国では、第1回から第3回の十字軍の際、歴代の皇帝は西ヨーロッパはビザンツ帝国を侵略する意図があると疑って、領内を進む十字軍を妨害し、さらにはその動向をサラセン人（イスラム教徒）に報告したことさえあった。また、第4回十字軍のビザンツ帝国に対する略奪行為は、西ヨーロッパの人々に根付く同帝国への敵対心の結果でもあった。こうした経緯もあり、ラテン帝国の崩壊後、新たに復活を遂げたビザンツ帝国が恐れたのは、イスラム教徒ではなく西ヨーロッパのキリスト教徒であった（伊藤『モンゴルVS. 西欧VS. イスラム』129頁）。

<sup>45</sup> この略奪行為については、ロベール＝ド＝クラリ『コンスタンチノーブル遠征記——第四回十字軍』伊藤敏樹訳・解説（筑摩書房、1995年）に詳しい。

<sup>46</sup> 十字軍の遠征で地中海を中心とした東方貿易が発達し、経済力を付けた都市は自治権を獲得、ヨーロッパ全域に「自由都市」が誕生した。十字軍によりイタリアの諸都市は、戦力及び物資の輸送を担当し、さらにはビザンツ帝国の商人に代わって東地中海の貿易を拡大した結果、巨万の富を得ることになった。地中海やイタリアの自由都市は、どの帝国にもどの王国にも従属することなく、自らが望む利益の交換を実施したのである（伊藤『モンゴルVS. 西欧VS. イスラム』218頁）。

<sup>47</sup> 高山『ヨーロッパとイスラーム世界』61頁。13世紀を迎えると、第4回、第5回、第6回と3度にわたる十字軍がオリエントに向けて遠征を実施したが、ここで聖地をめぐるイスラム教徒とキリスト教徒の対立の構図が崩れ始めることになる（伊藤『モンゴルVS. 西欧VS. イスラム』235頁）。実は、チンギス＝ハンがモンゴルの土地を離れて征服戦争へと乗り出した時期は、第5回十字軍の時期にはほぼ相当する（伊藤『モンゴルVS. 西欧VS. イスラム』236頁）。

<sup>48</sup> 高山『ヨーロッパとイスラーム世界』61頁。

聖ローマ皇帝フリードリヒ二世の十字軍（1228～29年）が第6回、ルイ九世（Louis IX）の第1回十字軍（1248～54年）が第7回、ルイ九世の第2回十字軍（1270年）が第8回となり、ジャン・ド・ブリエンヌのエジプト遠征を第5回十字軍と数えなければ、上記の十字軍がそれぞれ第5回、第6回、第7回と繰り返ることになる<sup>49</sup>。本論では便宜上、オリエントへの十字軍は大規模なもので8回実施されたとの立場で論述を進めるものとする<sup>50</sup>。

但し、結論的にはキリスト教徒側にとってこうした十字軍はいずれも、あまり大きな成果を挙げたものとは言えなかった。

1218年にはジャン・ド・ブリエンヌのエジプト遠征が実施され、それに続いて1228年には神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世（Friedrich II）の十字軍が出発している。

第5回十字軍の目的は、イスラム教徒アイユーブ朝の中心地域——エジプト——を攻撃し、これによってエルサレム王国の旧来の領地を回復することであった<sup>51</sup>。また、この第5回十字軍は、中央アジアのイスラム教徒に対して攻撃を続けるチンギス=ハン（Genghis Khan）を、キリスト教徒を支援するために東方から出現するという伝説のプレスター・ジョン（司祭ジョン）（Prester John）と重ねていた<sup>52</sup>。

その後、1248年にはルイ九世の十字軍が出発し、続いて1270年には、ルイ九世の2度目の十字軍が実施されている<sup>53</sup>。

興味深いことに、第7回と続く第8回の十字軍には、モンゴル帝国の動向が大きく関係した<sup>54</sup>。そして当初、これらの十字軍はイスラム、西ヨーロッパ、モンゴルの3つの極が絡む大規模な戦争の契機となると考えられていた<sup>55</sup>。だが、この第7回と第8回十字軍は、既に戦う前に自滅していた。衛生状態の酷さと新鮮な食糧の欠乏の結果、軍隊にチフスと赤痢が蔓延したことが大きな原因である<sup>56</sup>。

<sup>49</sup> 八塚『十字軍という聖戦』19～23頁、新人物往来社編『十字軍全史』91頁。タート『十字軍』188～191頁。

<sup>50</sup> こうした論争について詳しくは、八塚『十字軍という聖戦』9～23頁。新人物往来社編『十字軍全史』91頁。タート『十字軍』188～191頁を参照。

<sup>51</sup> ジョティシュキー『十字軍の歴史』344頁。

<sup>52</sup> 伊藤『モンゴルVS. 西欧VS. イスラム』8頁。ヨーロッパ諸国に、敵であるイスラム教徒の後方、つまり東方にネストリウス派キリスト教徒の国家が存在するとの噂が広まった。その国の王の名前は英語でプレスター・ジョンであり、十字軍の救世主となるとの期待が持たれた。ここに「プレスター・ジョン伝説」が生まれたのである（杉山正明『モンゴル帝国の興亡 上』（講談社現代新書、1996年）、104頁）。

<sup>53</sup> ルイ九世の2度にわたる十字軍については、伊藤『モンゴルVS. 西欧VS. イスラム』46～182頁を参照。ルイ九世などは、モンゴル帝国と協力してイスラム勢力を打倒し、エルサレムを奪回しようと考えていた。

<sup>54</sup> 伊藤『モンゴルVS. 西欧VS. イスラム』231頁。例えばモンゴル帝国は、他の宗教に寛容であったとされるが、実は寛容性とは無関心の言い換えに過ぎない。同帝国は異常なまでに軍事と政治、支配と統治だけに関心を示したのである（杉山正明『モンゴル帝国の興亡 下』（講談社現代新書、1996年）198頁）。

<sup>55</sup> 伊藤『モンゴルVS. 西欧VS. イスラム』168頁。

<sup>56</sup> 同上、177頁。

なお、この2つの十字軍の前の1241年春には、北ヨーロッパを防衛するために軍隊を動員して戦うよう、ドイツ各地のキリスト教司教はモンゴル帝国に対抗する十字軍を説くようになっていた(対モンゴル十字軍)。同年、モンゴル帝国は南ロシア、ポーランド、ハンガリーを弧を描くようにして破壊し一掃、ウィーンを包囲する構えを見せたものの、十分な牧草地が不足し、また帝国の新たな皇帝を選出する<sup>ハン</sup>必要から、ヨーロッパでの戦争から手を引いたのである<sup>57</sup>。

### (4) 十字軍後のヨーロッパ

その後のヨーロッパ史における十字軍との関連事項を簡単に記しておけば、1453年にオスマン帝国メフメト二世(Mehmet II)がコンスタンチノーブルを占領し、ここにビザンツ帝国(東ローマ帝国)が滅亡した<sup>58</sup>。他方、1492年にはイベリア半島でのレコンキスタ(一般には「国土回復運動」と訳される)が完成し、同半島のイスラム教国が滅亡している<sup>59</sup>。

だが、1522年にはオスマン帝国スレイマン大帝(一世)(Süleyman I)がロードス島を占領し地中海へと進出、これに対して1571年、スペイン、ヴェネチア、ローマ教皇などによる神聖同盟が「レパントの海戦」でオスマン帝国艦隊を撃破している<sup>60</sup>。

### (5) 十字軍の諸相

改めて十字軍の目的を整理すれば、実施された一連の十字軍を通じて多様な動機が挙げられる。それには大きく、①宗教的動機、と、②世俗的動機、に分類でき、さらに世俗的動機は、政治的なものと経済的なものへの区分が可能である<sup>61</sup>。

<sup>57</sup> ジョティシユキー『十字軍の歴史』373頁。

<sup>58</sup> 1453年のコンスタンチノーブルの包囲戦では、メフメト二世は有名な「艦隊の山越え」を敢行した。また、この包囲に先立ってハンガリー人のウルバンが、自らが開発した大砲を双方に売り込んだ事実はよく知られている。

<sup>59</sup> 1492年は「近代」の幕開けを告げる象徴的な出来事が起きた年とされる。第1に、ヨーロッパでのイスラム教徒の最後の砦であったグラナダが征服され、レコンキスタ(国土回復運動)が完成した。第2に、その結果、イスラム教徒に加えてユダヤ教徒に対してもキリスト教に改宗するか出国するかという厳しい選択が迫られ、10万ものユダヤ教徒が流浪を余儀なくされた。第3に、クリストファー・コロンブスがインドに向かう目的で大西洋を越え、新たな大陸を発見した。興味深いことに、彼は、インドにイスラムに対するキリスト教世界の新たな十字軍活動を始める前進基地を建設したい、と述べていた。つまり、大航海時代のコロンブスは富を求めただけでなく、宗教的な意味合いも自らの航海に含んでいた。獲得した富を基にしてエルサレムの奪回を図ったのである。詳しくは、伊藤『モンゴル VS. 西欧 VS. イスラム』46～182頁を参照。

<sup>60</sup> 1453年、オスマン帝国がビザンツ帝国を崩壊させてヨーロッパのまさに入口まで進出してきた時、イスラムが弱体化したヨーロッパ世界を飲み込んでしまう、との中世の悪夢がその頂点に達した。この恐怖は、1571年の「レパントの海戦」まで続くことになる。

<sup>61</sup> 八塚『十字軍という聖戦』55～77頁。新人物往来社編『十字軍全史』10～21頁。タート『十字軍』



第1に、宗教的動機であるが、当然これにはエルサレムの解放と巡礼が含まれる。十字軍の意味についてジャン・リシャール (Jean Richard) は、安易な方法ではなく、苦しみと死と試練の中で信仰を証明する機会であった、とやや好意的に解釈している<sup>62</sup>。もちろん、そこにはいわゆる「贖宥」、つまり罪の償いの免除が約束されていた。

第2の世俗的動機、その中でも政治的動機として、ローマ教皇によるキリスト教世界の統合が挙げられ、そこでは異教徒に対する戦いと異端に対する戦いが展開された<sup>63</sup>。異端に対する戦いは、異端審問や魔女狩りなどの事例が知られ、英仏百年戦争 (1339～1453 年) におけるジャンヌ・ダルク (Jeanne d'Arc) はその代表的人物である<sup>64</sup>。

東方 (ギリシア) 正教会ですら異端と見なされることもあり、さらには中世ヨーロッパの世俗権威である神聖ローマ帝国皇帝も、ローマからすれば異端であった。

最後に、世俗的な経済的動機としては、土地や新たな生活を求めてのものが挙げられるが、こうしたものを求めて十字軍に参加した人々の多くは、宗教とは無縁であった。

## (6) 十字軍の終結

十字軍の起源とは対照的に、それがいつ終結したのか、さらには、どの遠征及び事件を十字軍と考えるかについては、歴史家の見解が大きく分かれている<sup>65</sup>。

戦争の終結時期については、1291年にヨーロッパ世界が最後まで所有していた十字軍国家が崩壊した時点とする歴史家も多い<sup>66</sup>。また、17世紀のトルコ人との戦いまでもが十字軍と考える論者も存在し、唯一かつ明確な目的をもって最後の大規模な遠征が行われた1330年代を終結時点とする論者も多い。

39～41頁。

<sup>62</sup> 詳しくは、ジャン・リシャール『十字軍の精神』宮松浩憲訳 (法政大学出版局、2004年) を参照。中世においては、祈ることも1つの戦闘行為であった。

<sup>63</sup> その意味では、十字軍とは西方 (西ヨーロッパ) 地域での「神の平和」と、東方 (オリエント) でのイスラム教徒に対する「神の戦争」が合体したものである (山内『十字軍の思想』63～65頁)。中世ヨーロッパの歴代のローマ教皇はフランス出身者が多いため、十字軍とはフランスを中心とする戦いであった、ということも可能である。

<sup>64</sup> 英仏百年戦争については、城戸毅『百年戦争——中世末期の英仏関係』(刀水書房、2010年) を参照。また、例えばヤン・フス (Jan Hus) はボヘミア (現在のチェコ) の神学者であるが、彼は聖職者による土地所有、カトリック教会による贖宥状の販売、を批判したため、異端として1415年に火炙りの刑に処せられた (石川『キリスト教と戦争』46頁)。さらには、16世紀後半、フランスにおけるプロテスタント「ユグノー」とカトリックとの間で約40年にもわたって続いたユグノー戦争と「サン・バルテルミの虐殺」なども、よく知られた事例である。

<sup>65</sup> 八塚『十字軍という聖戦』18～23頁。新人物往来社編『十字軍全史』91頁。タート『十字軍』39～43頁。

<sup>66</sup> ジョティシユキー『十字軍の歴史』8～9頁。

さらには、1348年に黒死病がヨーロッパに蔓延した時期を十字軍の終結と捉える見解もある。

今日においてもいまだに十字軍は続いているとするやや極端な見解を有する歴史家も存在し、2000年に当時のローマ法王が十字軍について正式に謝罪した事実をもって、十字軍の終結と捉える見解もまた注目を集めた<sup>67</sup>。

#### (7) その他(地域、対象、時代)の十字軍

実は、十字軍を考える際に絶対に見落としてはならない点が、その他の地域に対する十字軍、その他の対象に対する十字軍、さらには、それ以降の時代の十字軍の存在、である<sup>68</sup>。

第1に、ヨーロッパ内部での十字軍について簡単に考えてみよう。ここでは大別して、①異端への十字軍、②政治的十字軍、③警察的十字軍、が挙げられる<sup>69</sup>。

異端への十字軍とは、カタリ派、フス派、ルター派といった同じキリスト教でも少数派に属する人々に対して行われた弾圧である。

次の政治的十字軍とは、例えばドイツ(神聖ローマ帝国)のフリードリヒ二世やイギリスのエリザベス女王(Elizabeth I)に対して実施されたものであり、その中でもエリザベス女王に対する十字軍は、1588年のスペイン無敵艦隊による遠征とアマルダの戦いとして広く知られている<sup>70</sup>。

最後の警察的十字軍はやや理解し難いが、アビニョン教皇庁——ローマ教皇庁は、その時代の政治状況によってしばしば別の場所への移転を余儀なくされていた——に対する強盗団の討伐を目的として実施されたものである。

第2にエルサレム及びオリエント方面を除くヨーロッパ外部への十字軍であるが、これには前述した対モンゴル十字軍、レコンキスタ(718~1492年)、「北の十字軍」(13世紀)などが挙げられる。

対モンゴル十字軍とは、当時、ユーラシア大陸を席卷しつつあったモンゴル帝国に対する防衛的な十字軍であったが、ここではキリスト教徒、イスラム教徒、そしてモンゴル帝国(モン

<sup>67</sup> 2000年になってようやくローマ法王ヨハネ・パウロ二世(Ioannes Paulus II)は、十字軍の経緯の中でイスラム圏やビザンツ圏でなされた行為について謝罪した。

<sup>68</sup> 十字軍の地理的範囲についても、イベリア半島やバルト海沿岸地域での異教徒との戦いをその一部と考える解釈が主流になりつつある(ジョティシュキー『十字軍の歴史』9~10頁)。

<sup>69</sup> 八塚『十字軍という聖戦』58~77頁。新人物往来社編『十字軍全史』14~22頁。タート『十字軍』35~37頁。山内『十字軍の思想』104~105頁。

<sup>70</sup> スペインの「無敵艦隊」に対してイギリス海軍は、フランシス・ドレーク(Sir Francis Drake)を中心としてゲリラ戦法を用いて戦った。自らの船に火を放ち、そのままスペイン艦隊に突撃させて炎上させる火船攻撃や、夜間の奇襲攻撃である。ローマ教皇はエリザベス一世を破門し、1588年以前から彼女の暗殺をヨーロッパのキリスト教諸国に訴えていた。

ゴル人にはキリスト教徒もイスラム教徒も、仏教徒も多数存在した) のいわば三つ巴の戦いが展開されたのである<sup>71</sup>。

一般にレコンキスタは十字軍と結び付き難いが、実はこれも十字軍の1つとして考えられている<sup>72</sup>。レコンキスタは国土回復運動と訳されるのが通例であるが、これを直訳すれば「再征服」であり、キリスト教徒側からすれば、イスラム教徒に占領されたイベリア半島の再征服を目指した戦いであった<sup>73</sup>。事実、スペインの歴史学者の間では、8世紀に始まったとされるレコンキスタは十字軍の原型であると考えられ、これがフランスの騎士を惹き付けたと解釈されている<sup>74</sup>。

確かに、レコンキスタの「バルバastro (スペインのアラゴン地方) の戦い」では軍人に贖宥が約束されていた。また、レコンキスタの最盛期がオリエント方面への十字軍の時期と重なるのは単なる偶然ではない。

次に、「北の十字軍」とは、主としてドイツ騎士団によって行われたバルト海沿岸の異教徒に対するいわば侵略行為であり、こうした戦いでアレクサンドル・ネフスキー (Alexander Yaroslavich Nevsky) が徹底抗戦した事実はよく知られている<sup>75</sup>。

このようなヨーロッパ外部での十字軍、そしてもちろんヨーロッパ内部での十字軍において、キリスト教徒は敵対するイスラム教徒はもとより、ユダヤ教徒に対する残虐行為も多々行っている。すなわち、十字軍とは必ずしもキリスト教徒によるイスラム教徒との戦いを意味するだけでなく、ユダヤ教徒に対する戦い及び迫害、さらには同じキリスト教徒でも少数派に対する戦い及び迫害、が含まれているのである。

そして最後の第3が、この両者のいわゆる「中間」での戦いである。これは、「分裂主義者——東方 (ギリシア) 正教会——に対する十字軍であるとされ、異端ではないものの分裂主義者と考えられた東方正教会に対して、十字軍が実施されたのである (前述したように、これを異端と糾弾するキリスト教徒も一部には存在した)。第4回十字軍は、その最も広く知られた事

<sup>71</sup> こうした観点からすれば、オリエント方面への十字軍の時代は、モンゴル帝国とマムルーク朝 (イスラム教徒) によって終結したと言える (伊藤『モンゴル VS. 西欧 VS. イスラム』229頁)。

<sup>72</sup> レコンキスタについては、高山『ヨーロッパとイスラーム世界』43～49頁。岩根園和『物語 スペインの歴史 海洋帝国の黄金時代』(中公新書、2002年) 44～92頁を参照。

<sup>73</sup> 例えば12世紀後半のトレドには、ヨーロッパ中から研究者が集まり、イスラムの学問の成果を学んだ。同地のイスラム教徒はユダヤ教徒やキリスト教徒とも協力し、多くの学問の翻訳を行い、いわゆる「暗黒時代」にヨーロッパが失ったとされる学問の復活に貢献した。だが、レコンキスタの進展及びキリスト教の拡大に伴い、マラノと呼ばれる「隠れユダヤ教徒」は、モリスコと呼ばれる「隠れイスラム教徒」と共に、スペインでの異端審問に晒されることになる。当初の異端審問はキリスト教内での異端に限られていたが、1492年のグラナダ陥落後のスペインでは、ユダヤ教徒とイスラム教徒に対して本当に改宗したかどうかに関する異端審問が行われたのである。

<sup>74</sup> ジョティシュキー『十字軍の歴史』58頁。

<sup>75</sup> 「北の十字軍」について詳しくは、山内『十字軍の思想』94～95頁。山内進『北の十字軍——「ヨーロッパ」の北方拡大』(講談社選書メチエ、1997年)を参照。

例である。

(8) 十字軍がもたらしたもの

オリエン特方面への全般的な十字軍の失敗を受けて、ヨーロッパのキリスト教社会を中心として、十字軍を実施した結果として唯一得られたものが<sup>アブリコット</sup>あんずだけである、との皮肉交じりの評価が見られた。

しかしながら、こうした認識は完全に誤りである。実際には十字軍を通じてヨーロッパ世界は、オリエントの先進性を多々持ち帰った<sup>76</sup>。それには、医学、文学、哲学など当時の最先端の学問が含まれ、実は、これによって古代ギリシア＝ローマ文化のいわば逆輸入が可能となり、こうした知識が結果としてヨーロッパにおけるルネサンス（14～16世紀）の基礎を形成するに至ったのである。

戦争や軍事の領域に限定しても、例えばシリアのクラック・デ・シュヴァリエ（騎士の城）は、十字軍の戦いでキリスト教徒とイスラム教徒の争奪の場となったが、その強固な城の構造はその後、ヨーロッパ各地の城塞の手本となったのである<sup>77</sup>。

また、当時の国際政治を考えてみても、とりわけ十字軍の後半期におけるオスマン帝国の地中海進出の結果、皮肉にもヨーロッパは大航海時代へと乗り出すことになる<sup>78</sup>。地中海の代替ルートを探す必要が生じたからである<sup>79</sup>。こうした大航海時代を主導したスペインは、前述のレコンキスタの結果として強大になりつつあった国家である。

さらに、一連の十字軍を通じてヨーロッパ諸国には、キリスト教共同体——ヨーロッパ——という強い意識が生まれたが、これは同時に他者——異教徒——に対する不寛容の増大にも繋がった<sup>80</sup>。そして、異教徒に対するキリスト教徒の残虐行為は、イスラム社会全般の強い反発

<sup>76</sup> 八塚『十字軍という聖戦』232～240頁、新人物往来社編『十字軍全史』6～9頁、タート『十字軍』180～187頁。

<sup>77</sup> クラック・デ・シュヴァリエは文字通り「騎士の城」という意味であり、2,000名の兵士が常駐し、5年間の包囲に耐え得るよう工夫されていた。この城は、後のヨーロッパ各地の城郭の基礎となったものである。

<sup>78</sup> 詳しくは、増田義郎『図説 大航海時代』（河出書房新社、2008年）46～56頁。森村宗冬『大航海時代』（新紀元社、2013年）18～34頁を参照。オスマン帝国との関係で言えば、同帝国のバヤズィット一世（Beyazıt I）は1396年、「ニコポリスの戦い」でハンガリー王ジギスムント（Sigismund）率いるヨーロッパ連合軍（ニコポリス十字軍）に勝利し、ドナウ川以南のバルカン支配を確立した（久保一之『ティムール——草原とオアシスの覇者』（山川出版社、2014年、4頁）。そして、この「ニコポリスの戦い」は、キリスト教世界にとって中世最後の大規模な十字軍との評価もあり、ハンガリーの他にフランス、ワラキア公国、聖ヨハネ騎士団などが派兵し、個人の参加も多く見られた（久保『ティムール』36頁）。

<sup>79</sup> 新井政美『オスマンVS. ヨーロッパ——〈トルコの脅威〉とは何だったのか』（講談社選書メチエ、2002年）118～147頁。

<sup>80</sup> 高山『ヨーロッパとイスラーム世界』62～63頁。

を招いたのである。

今日、日本での十字軍をめぐる認識は、主としてヨーロッパ諸国、つまりキリスト教社会の人々によって執筆された文献をその主たる源としており、その結果、どうしてもキリスト教徒の立場からの歴史解釈が主流となっている。だが、仮に立場を入れ替え、イスラム教徒側から十字軍を考察してみれば、全く異なった評価が出てくる<sup>81</sup>。

また、キリスト教社会、さらには日本においても十字軍という言葉は、正義、献身、命懸けといった肯定的なイメージを想起させる。しかしながら、イスラム教徒の認識、さらにはユダヤ教徒の認識では、十字軍という言葉は虐殺や略奪との記憶を想起させることになる<sup>82</sup>。

#### 4 「十字軍の思想」(キリスト教における十字軍的発想)の系譜

##### (1) ルターからピューリタリズムへ

時代はやや下るが、マルティン・ルター (Martin Luther 1483~1546年) の登場によって十字軍は終結したとの評価がある。

周知のように、ルターは十字軍の目的の1つであった贖宥という考えに懐疑的であり、贖宥の1つの表現である贖宥状(免罪符)への批判を強めた。彼によれば、贖宥など『聖書』のどこにも書かれていないのである<sup>83</sup>。こうして、ヨーロッパで宗教改革が始まることになるが、まさにこの時期に「制度化された十字軍」が終結したことは事実である<sup>84</sup>。

興味深いことに、当時のキリスト教(カトリック)のあり方に批判的であった人々、つまりプロテスタント側にも「十字軍の思想」は引き継がれ、ある意味においてプロテスタントの中の十字軍の思想は、カトリック側とは比較できないほど激烈化することになった<sup>85</sup>。

##### (2) クロムウェルと「神の正義」

こうしたプロテスタント、例えば一般にピューリタン(清教徒)と呼ばれるイギリスのプロテスタントで中心的役割を演じたのが、オリバー・クロムウェル (Oliver Cromwell) であった。

<sup>81</sup> マアルーフ『アラブが見た十字軍』3~9頁。

<sup>82</sup> いわゆる「イスラム国」が2人の日本国民を人質に取った際に出した声明には、日本が十字軍に参加したとの一節が含まれていた。なお、1979年以降の「イスラーム主義」について詳しくは、池内恵『イスラーム国の衝撃』(文芸春秋社、2015年)212~213頁を参照。

<sup>83</sup> 橋爪『世界がわかる宗教社会学入門』100~105頁。

<sup>84</sup> こうした点について詳しくは、山内『十字軍の思想』85~88頁。岡山、李、渡辺、野寺、岩崎『キリスト者の平和論・戦争論』49~51頁を参照。

<sup>85</sup> 山内『十字軍の思想』132頁、156~157頁。

クロムウェルは飲酒や賭け事を禁じるなど、国民に対して禁欲的な生活を求めた。その一方で彼は、「鉄騎隊」と呼ばれる近代の国民軍に近い性格の新たな軍隊——「新型軍」——を組織するなど、戦争においてもその指導力を大いに発揮した。彼は、軍隊にはとりわけ信仰心が必要であると考え、兵士には彼らが神の正義のために選ばれたと呼び掛けたとされる<sup>86</sup>。

そこではイギリス国王及びイギリス国教会との激しい戦いが展開され、それが、清教徒革命（1642～60年）、イギリス国王チャールズ一世（Charles I）の処刑、さらに最終的にはクロムウェルのアイルランド遠征（1649～53年）——聖者の軍隊——へと発展していく<sup>87</sup>。そして、1649年にチャールズ一世を斬首した後、クロムウェルは自らを「護国卿」と称してイギリスにピューリタンによる共和国を設立したのである。

### 5 三〇年戦争について

#### (1) 三〇年戦争とは何か

次に、宗教と戦争の関係性を考えるためのさらなる事例として、三〇年戦争について概観してみよう。

三〇年戦争とは1618～48年、今日のドイツを中心として戦われたヨーロッパ諸国（侯）間の大規模な戦争である。そこでは、カトリックである神聖ローマ帝国（スペインを含む）と、プロテスタントであるスウェーデン、デンマーク、オランダなどによる宗教をめぐる戦いの側面が強いことは事実であるが、同時に、ハプスブルク家（オーストリア及びスペイン）とブルボン家（フランス）の対立という政治的な側面も認められる<sup>88</sup>。

つまり、ヨーロッパ最後の、そして最大規模の「宗教」戦争との評価が一般的であるものの、実はこうした側面は三〇年戦争の半ば過ぎまでであり、その後は、例えばプロテスタント諸国（侯）の多くが神聖ローマ皇帝（カトリック）側に立ってスウェーデン（プロテスタント）やフランス（カトリック）と戦う場面も見られた<sup>89</sup>。なるほどこの戦争が宗教的色彩の強いドイ

<sup>86</sup> 山内『十字軍の思想』158～162頁。小泉徹『クロムウェル——「神の摂理」を生きる』（山川出版社、2015年）20～26、50～51頁。

<sup>87</sup> 小泉『クロムウェル』20～26頁、50～51頁。1645年6月、「鉄騎隊」を率いたクロムウェルが「ネーズビーの戦い」で王党派を撃破、それ以降は議会派が優勢になった。チャールズ一世の死後、クロムウェルは共和制を樹立し、自らは護国卿として政権を掌握したが、独裁色が強かったため国民の不満が再び高まり、1660年には王政復古が実現した。だがその後、王の独裁政治がさらなる反発を誘い、これが無血の「名誉革命」へと繋がったのである。併せて、石川『キリスト教と戦争』60～61頁を参照。

<sup>88</sup> 三〇年戦争について詳しくは、小沢郁郎『世界軍事史——人間はなぜ戦争をするのか』（同成社、1986年）179～182頁を参照。

<sup>89</sup> 『別冊歴史読本 総集編「世界の戦史」』別冊歴史読本特別増刊第18巻31号（新人物往来社、1993年）110頁。

ツの内乱あるいは内戦として始まったことは事実であるが、その後は当時のヨーロッパ主要諸国を巻き込んだ大規模な「政治」戦争——国際的な覇権戦争——へと発展したのである<sup>90</sup>。やはり三〇年戦争も、純粋に宗教をめぐる対立ではなかったのである。

## (2) 三〇年戦争の諸相

以下では、三〇年戦争を4つの時期に区分し、概観しておこう<sup>91</sup>。

第1期はボヘミア＝プファルツ戦争（1618～23年）である。

オーストリアのハプスブルク家フェルディナント二世（Ferdinand II 1578～1637年）がボヘミアの王に就き、同地のプロテスタントに対する弾圧が始まる。これに対してプファルツ（今日のドイツ南西部）のフリードリヒ五世（Friedrich V）が立ち上がり、その後プラハで一般の人々も抵抗を始めた。彼らは1618年、王宮を襲撃して国王の顧問などを王宮の窓から投げ落としたが、この事件が三〇年戦争の直接的な契機となり、ここにこの戦争の第1期ボヘミア＝プファルツ戦争が勃発した<sup>92</sup>。

戦いは激烈化したものの、1620年の「ビーラ・ホラの戦い」でプロテスタント側が敗北したことを転機として、この戦争は終結へと向かい、カトリックであるハプスブルク家のボヘミア支配体制が強化されることになった。1623年のことである。

続く第2期はデンマーク＝ニーダーザクセン戦争（1625～26年）である。

ボヘミアがハプスブルク家の属領となった結果、同家の勢力拡大を恐れたフランス（カトリック）の宰相リシュリュー（Armand Jean du Plessis de Richelieu）はイングランド、ネーデルラント、スウェーデン、デンマークなどプロテスタント諸国に働き掛け「ハーグ同盟」を締結した。

フランスはハプスブルク家と同じカトリックであったが、この同盟を締結した国家の殆どはプロテスタントであった。リシュリューは宗教ではなくフランスの国家政策あるいは国益を優先したのであり、ここにも三〇年戦争が必ずしも宗教をめぐる対立とは言えない1つの論拠が見出せる<sup>93</sup>。

デンマークのクリスティアン四世（Christian IV）は、ドイツ各地のプロテスタント保護の名目で軍隊を南下させた。これが、三〇年戦争の第2期デンマーク＝ニーダーザクセン戦争である。

<sup>90</sup> 同上、110頁。

<sup>91</sup> 出口治明『知略を養う 戦争と外交の世界史』（かんき出版、2018年）97頁。以下の4つの区分は出口による。

<sup>92</sup> 同上、97頁。

<sup>93</sup> 出口『知略を養う 戦争と外交の世界史』100頁。

だが戦局はクリスティアン四世の期待通りには推移せず、フェルディナント二世側の傭兵隊長ヴァレンシュタイン (Albrecht von Wallenstein) の活躍によってデンマークは敗北し、同国は三〇年戦争の舞台から去ることを余儀なくされた<sup>94</sup>。

第3期はスウェーデン戦争 (1630～35年) と呼ばれる。

1630年、デンマークに勝利したヴァレンシュタインの名声の高まりを懸念したフェルディナント二世は、彼を解任した。他方、プロテスタント側ではデンマークが敗北した後、リシュリューは戦略の見直しを余儀なくされ、その中核をスウェーデン王グスタフ・アドルフ (二世) (Gustav II Adolf) に託すことに決めた。

そのグスタフ・アドルフ率いるスウェーデン軍は、同年7月に北部ドイツに上陸する。その後、彼の軍隊は進撃を続け、皇帝側は敗北を重ねたが、皮肉にもその結果が、ヴァレンシュタインの再登用に繋がるのである<sup>95</sup>。

### (3) グスタフ・アドルフとヴァレンシュタイン

三〇年戦争の主要な人物としてスウェーデン王グスタフ・アドルフが挙げられるが、彼はルター派のプロテスタントであり、彼の軍隊は厳格に規律を守ることでも有名であった。同時に、占領地域のカトリック教徒に対して改宗を強いることもなかった。

1632年11月、グスタフ・アドルフ軍とヴァレンシュタインのハプスブルク軍は、ライプツィヒ郊外のリュッツェンで戦い、互いに決定的な勝利には至らなかったものの、同地でグスタフ・アドルフは戦死した<sup>96</sup>。

その後、ヴァレンシュタインの活躍に再び危機感を覚えたフェルディナント二世は、1634年、彼の暗殺を命じたのである。

三〇年戦争のもう1人の主役と評価されるヴァレンシュタインであるが、彼は宗教的熱狂や

---

<sup>94</sup> 同上、100～101頁。

<sup>95</sup> 同上、102～103頁。

<sup>96</sup> グスタフ・アドルフとプロテスタント諸国 (侯) の軍に当たったのは、カトリック側の総司令官ティリであった。1631年9月、ライプツィヒ北部のブライテンフェルトで決戦が行われたが、この戦いはティリの敗北に終わった (「ブライテンフェルトの戦い」について詳しくは、樺山紘一編『大航海時代の戦争——エリザベス女王と無敵艦隊』(講談社、1985年) 251頁を参照)。以降、グスタフ・アドルフは1632年4月までに西はマインツ、南はミュンヘンに到達し、同盟国のザクセン軍はブラハを占領している (『別冊歴史読本 総集編「世界の戦史」』114頁)。

こうした戦局の悪化を受けて皇帝は、ヴァレンシュタインを再び起用したのである。グスタフ・アドルフは、このヴァレンシュタイン軍に南ドイツを追われ、1632年11月にリュッツェンでヴァレンシュタイン軍と戦い、グスタフ・アドルフは同地で戦死した (『別冊歴史読本 総集編「世界の戦史」』114～15頁。なお、「リュッツェンの戦い」について詳しくは、樺山編『大航海時代の戦争』258～59頁を参照)。だがその後、1634年2月、ヴァレンシュタインは謀反の疑いで皇帝が派遣した刺客に暗殺されることになる。



宗教的不寛容とは全く無縁の人物であった。彼は合理的計算（打算）、そして企業家精神で溢れていた<sup>97</sup>。そして、こうした事実からは三〇年戦争の宗教的側面は全く見受けられない。

最後の第4期はフランス＝スウェーデン戦争（1635～48年）である。

前述したように、フランスの宰相リシュリューは、ハプスブルク家の勢力拡大に対抗する目的で反ハプスブルク同盟を締結した。その一方で、同国がハプスブルク家と同じくカトリックを国家の宗教としていたこともあり、直接的に戦うことはこれまで控えていた。

しかしながら、ヴァレンシュタイン暗殺を好機と捉えたりシュリューは1635年、フランスの参戦を決意した。これが、三〇年戦争の第4期フランス＝スウェーデン戦争の始まりである。

ここでは、フランスはスペインのハプスブルク家と戦う機会が多く、スウェーデンがオーストリアのハプスブルク家と戦うといった一般的な対立構図が成立する。戦争が長期化する中で1637年にフェルディナント二世が死去し、その後、和平への兆しも見られたものの、結局その終結は1648年まで待つしかなかった。

#### (4) 三〇年戦争の宗教的側面と政治的側面

言うまでもなく、三〇年戦争には宗教的側面が大きく影響を及ぼしている。

その核心は、前述のルターの宗教改革（1517年）を端緒とするプロテスタントとカトリックの対立であり、こうした対立が三〇年戦争のいわば「前哨戦」を形成することになった。もちろん、この対立はアウグスブルクの宗教和議（1555年）で一旦は落ち着いていたが、その後60年余りを経て、ヨーロッパは宗教をめぐる対立に再び巻き込まれたのである。

では次に、三〇年戦争の政治的側面について考えてみよう。

当時、ハプスブルク家（スペイン及びオーストリア）に包囲されていると危機感を抱いていたブルボン家（フランス）は、東西のハプスブルク家の弱体化を模索しており、それが三〇年戦争への介入及び参戦に繋がった<sup>98</sup>。事実、フランスは同じカトリックであるオーストリアへの対抗上、ドイツさらにはヨーロッパのプロテスタント諸国（侯）を支援したのである。

また、スウェーデンが参戦した理由はバルト海での覇権確立であり、デンマークも同様であった。だからこそ、同じプロテスタントでありながらもこの両国は、バルト海の覇権をめぐって鋭く対立していたのである。またスウェーデンとデンマークは共に、ルター派のプロテスタント国家として国内を統一し、その後、バルト海さらには北海への関心を示しつつあったため、ドイツ北部には強い利害関係を有しており、ヨーロッパ全般の国際政治に無関心ではあり得な

<sup>97</sup> ヴァレンシュタインについて詳しくは、樺山編『大航海時代の戦争』246～48頁を参照。

<sup>98</sup> 『別冊歴史読本 総集編「世界の戦史」』111頁。

かったのである<sup>99</sup>。

一方、オランダは1568年からスペインに対して独立戦争を継続しており、三〇年戦争への関与は、独立へ向けての政治運動の一環であった<sup>100</sup>。

興味深いことに、この戦争を通じてカトリックのハプスブルク家の勢力が拡大するに連れて、皇帝の権力の強大化を懸念した多くのカトリック諸国（侯）は、プロテスタントに鞍替えするに至った。ここにも、宗教の問題と世俗的あるいは政治的な利害関係が微妙に交錯していた事実がうかがわれる。

そうしてみると、なるほど三〇年戦争の直接的な契機は宗教をめぐる対立であったが、より根源的な問題はハプスブルク家とブルボン家の対立であった。その意味において三〇年戦争は、ヨーロッパの国際政治戦争——覇権戦争——であったのである<sup>101</sup>。

### (5) 戦争の終結とウェストファリア条約の締結

実際に三〇年戦争の和平に向けての会議が開かれたのは1644年末であった。この会議にはほぼ全てのヨーロッパ諸国（侯）が代表を送っており、その意味ではヨーロッパ史上最大の講和会議であった。しかしながら、各国の利害対立もあって会議は殆ど進捗せず、その後約4年を費やすことになる。そしてようやく1648年10月24日、講和条約が成立した。これがウェストファリア条約であり、いわゆるウェストファリア体制の始まりである<sup>102</sup>。

ウェストファリア条約の主な内容は、①フランスはアルザス＝ロレーヌ地方を獲得、②スウェーデンはボルメルン地方の西側及びブレーメン地方を獲得、③ネーデルラント及びスイスの独立を正式に承認、④プロテスタントのカルヴァン派が承認され、帝国議会におけるローマ教会（カトリック）とプロテスタントの対等性を確認、⑤ドイツ領邦（諸侯の領地）の主権及び外交権の承認、であった<sup>103</sup>。

ここに、1517年のルターの「95カ条の論題」（宗教改革）から約130年を経た1648年、ヨーロッパの宗教的な対立がようやく決着した。その意味においてウェストファリア条約とは、一連のドイツ及びヨーロッパでの宗教をめぐる対立の最終結果と言えよう<sup>104</sup>。そして、三〇年戦争の結果、主権国家の登場と共に戦争の原因の1つとされた宗教的対立が取り除かれたので

<sup>99</sup> 大類伸監修、林健太郎、堀米庸三編集『ルネサンスと宗教戦争——陰謀と熱狂（世界の戦史5）』（人物往来社、1966年）147頁。

<sup>100</sup> 『別冊歴史読本 総集編「世界の戦史」』111頁。

<sup>101</sup> C. ヴェロニカ・ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』瀬原義生訳（刀水書房、2003年）32頁。

<sup>102</sup> 『別冊歴史読本 総集編「世界の戦史」』116頁。なお、ウェストファリア条約について詳しくは、樺山編『大航海時代の戦争』264頁を参照。

<sup>103</sup> 出口『知略を養う 戦争と外交の世界史』108頁。

<sup>104</sup> 同上、110頁。

ある<sup>105</sup>。

おわりに

最後に、宗教とは何かについて改めて考えてみよう。

宗教とは、人々の最大の不安である死への恐怖を埋める装置であるとされる。仮にそうであれば、人々はどうしても宗教を必要とするのであろう。だが、かつてイタリアの政治哲学者ニコロ・マキャヴェリ (Niccolò Machiavelli) は、神から人間へと秩序の原点を変化させた。神を人間に取り込むことによって、それは理性と呼ばれることになった。

しかし、それでも宗教はなくならなかった。つまり、「神の名の下に」は、「国家の名の下に」や「人民の名の下に」など、疑似宗教的なものに姿を変えながら、戦争が継続されているのである。確かに、20世紀にはいわゆる国家主義 (ナショナリズム) の高揚と共に、「祖国のために死ぬ」ことを目的とした新たな「宗教」言説が生まれてきた。

そうしてみると、宗教 (あるいは疑似宗教) の中に構造的に存在する「何か」が、対立や戦争へと導くのかも知れない。だがその一方で、技術が戦争の直接の原因でないのと同様、宗教も戦争の直接の原因ではないようにも思われる。

石川明人が鋭く指摘したように、仮に宗教の存在が戦争の原因であるとすれば、逆に、それを信仰する人々が平和に暮らしている時期について説明する必要が生じる。つまり、なぜある場所で、ある時期に、戦争が生じたのか説明できなければ、宗教と戦争の関連性は証明されないのである<sup>106</sup>。

同じく石川が指摘したように、なるほどしばしば宗教は戦争を遂行する人々の真の目的を隠匿し、さらにはその目的を安易に正当化することができる装置として用いられる。だがそれ以上に見落としてはならない事実は、宗教間の対立があたかも何百年も継続してきたかのような幻想が人々の間に存在するものの、通常はこうした対立は顕在化していない点である<sup>107</sup>。

そうして考えてみると、本論の当初の問題意識——宗教が戦争の原因か否かといった二項対立的な問題設定の仕方——そのものが、間違っていたのであろう。

キリスト教にせよ、その他の宗教にせよ、権力と結び付いた時に宗教は合理化される。すなわち、その宗教の聖典や教義が都合よく解釈し直され、不適當な部分は削除されるのである。そうであれば、やはり宗教や神はただ時代の権力者に利用されているに過ぎないとの議論に説得力が出てくる。

<sup>105</sup> 坂井榮八郎『ドイツ史 10 講』(岩波書店、2003年) 92頁。

<sup>106</sup> 石川『キリスト教と戦争』199頁。

<sup>107</sup> 石川『キリスト教と戦争』199頁。

## 戦史研究年報 第23号

だが、それにもかかわらず他の戦争の様相と比較して、いわゆる宗教戦争とイデオロギー戦争（フランス革命戦争及びナポレオン戦争、共産主義革命戦争）が激烈化する傾向が強いのは、疑いようのない事実である<sup>108</sup>。

---

<sup>108</sup> 橋爪『世界がわかる宗教社会学入門』280頁。

## ●参考1：十字軍関連年表（オリエント〔中近東〕のみ）

- 1095年 クレルモン会議（ローマ教皇ウルバヌス二世）、十字軍の派遣決議
- 1096年 第1回十字軍出発（1096～1099）、隠者ピエールの活躍
- 1099年 第1回十字軍エルサレム占領、イスラム教徒及びユダヤ教徒への残虐行為
- 1147年 第2回十字軍出発（1147～1149）、ダマスクスで敗北
- 1187年 サラーフディーン【サラディン】「ハッティーンの戦い」勝利、エルサレム奪回
- 1189年 第3回十字軍出発（1189～1192）
- 1191年 リチャード一世、フィリップ二世アッコン占領
- 1202年 第4回十字軍出発（1202～1204）
- 1204年 コンスタンチノーブル（ビザンツ帝国【東ローマ帝国】）占領、ラテン帝国建国
- 1218年 ジャン・ド・ブリエンヌのエジプト遠征（1217～1221）
- 1228年 神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世の十字軍出発（1228～1229）
- 1248年 ルイ九世の十字軍出発（1248～1254）
- 1270年 ルイ九世の2度目の十字軍出発（1270）
- 1453年 オスマン帝国のメフメト二世コンスタンチノーブル占領、ビザンツ帝国（東ローマ帝国）滅亡
- 1492年 イベリア半島でのレコンキスタ（国土回復運動）完成
- 1522年 オスマン帝国のスレイマン一世ロードス島占領
- 1571年 スペイン・ヴェネチア・ローマ教皇による神聖同盟「レパントの海戦」でオスマン帝国艦隊撃破

## 戦史研究年報 第23号

### ●参考2：三〇年戦争関連年表

1517年 マルティン・ルター「95カ条の論題」、ヨーロッパ宗教改革始まる。

1524～5年 ドイツ農民戦争

1555年 アウグスブルクの宗教和議

1618～48年 三〇年戦争

第1期 ボヘミア＝プファルツ戦争（1618～23年）

第2期 デンマーク＝ニーダーザクセン戦争（1625～26年）

第3期 スウェーデン戦争（1630～35年）

第4期 フランス＝スウェーデン戦争（1635～48年）

1631年 ブライテンフェルトの戦い

1632年 リュッツェンの戦い、グスタフ・アドルフ戦死

1634年 ヴァレンシュタイン暗殺

1644～8年 ウェストファリア講和会議

1648年 ウェストファリア条約締結